TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　623語

Pinocchio, Chapter 10

第10章　人形たちの大かんげい

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　劇場にとびこんだピノッキオを、人形たちは「兄弟だ！」と大かんげい。でも劇がめちゃくちゃになり、おそろしい座長があらわれて……。



The Marionettes recognize their brother Pinocchio, and greet him with loud cheers; but the Director, Fire Eater, happens along and poor Pinocchio almost loses his life.

Quick as a flash, Pinocchio disappeared into the Marionette Theater. And then something happened which almost caused a riot.

The curtain was up and the performance had started.

Harlequin and Pulcinella were reciting on the stage and, as usual, they were threatening each other with sticks and blows.

The theater was full of people, enjoying the spectacle and laughing till they cried at the antics of the two Marionettes.

The play continued for a few minutes, and then suddenly, without any warning, Harlequin stopped talking. Turning toward the audience, he pointed to the rear of the orchestra, yelling wildly at the same time:

“Look, look! Am I asleep or awake? Or do I really see Pinocchio there?”

“Yes, yes! It is Pinocchio!” screamed Pulcinella.

“It is! It is!” shrieked Signora Rosaura, peeking in from the side of the stage.

“It is Pinocchio! It is Pinocchio!” yelled all the Marionettes, pouring out of the wings. “It is Pinocchio. It is our brother Pinocchio! Hurrah for Pinocchio!”

“Pinocchio, come up to me!” shouted Harlequin. “Come to the arms of your wooden brothers!”

At such a loving invitation, Pinocchio, with one leap from the back of the orchestra, found himself in the front rows. With another leap, he was on the orchestra leader’s head. With a third, he landed on the stage.

It is impossible to describe the shrieks of joy, the warm embraces, the knocks, and the friendly greetings with which that strange company of dramatic actors and actresses received Pinocchio.

It was a heart-rending spectacle, but the audience, seeing that the play had stopped, became angry and began to yell:

“The play, the play, we want the play!”

The yelling was of no use, for the Marionettes, instead of going on with their act, made twice as much racket as before, and, lifting up Pinocchio on their shoulders, carried him around the stage in triumph.

At that very moment, the Director came out of his room. He had such a fearful appearance that one look at him would fill you with horror. His beard was as black as pitch, and so long that it reached from his chin down to his feet. His mouth was as wide as an oven, his teeth like yellow fangs, and his eyes, two glowing red

coals. In his huge, hairy hands, a long whip, made of green snakes and black cats' tails twisted together, swished through the air in a dangerous way.

At the unexpected apparition, no one dared even to breathe. One could almost hear a fly go by. Those poor Marionettes, one and all, trembled like leaves in a storm.

"Why have you brought such excitement into my theater;" the huge fellow asked Pinocchio with the voice of an ogre suffering with a cold.

"Believe me, your Honor, the fault was not mine."

"Enough! Be quiet! I'll take care of you later."

As soon as the play was over, the Director went to the kitchen, where a fine big lamb was slowly turning on the spit. More wood was needed to finish cooking it. He called Harlequin and Pulcinella and said to them:

"Bring that Marionette to me! He looks as if he were made of well-seasoned wood. He'll make a fine fire for this spit."

Harlequin and Pulcinella hesitated a bit. Then, frightened by a look from their master, they left the kitchen to obey him. A few minutes later they returned, carrying poor Pinocchio, who was wriggling and squirming like an eel and crying pitifully:

"Father, save me! I don't want to die! I don't want to die!"

あやつり人形たちは仲間のピノッキオに気づき、大かっさいでむかえます。ところが、そこへ座長の火食い親方がやって来て、ピノッキオはあやうく命を落としそうになります。

ピノッキオは、あっという間にあやつり人形劇場の中へ消えていきました。そして、あやうく大さわぎになりそうな出来事が起こりました。

幕はもう上がっていて、劇が始まっていました。

ぶたいではアルレッキーノとプルチネッラがせりふを言っていて、いつものように、ぼうでたたくぞ、なぐるぞと、おどし合っていました。

劇場はお客さんでいっぱいで、みんな劇を楽しみ、2つの人形のおどけたしぐさに、なみだが出るほど笑っていました。

劇は数分のあいだつづきましたが、とつぜん、なんの前ぶれもなく、アルレッキーノがせりふを言うのをやめました。アルレッキーノはお客さんのほうを向くと、客席のいちばんうしろを指さして、大声でさけびました。

「見て、見て！ぼくはねているのかな、起きているのかな？それとも、ほんとうにあそこにピノッキオがいるのかな？」

「そうだ、そうだ！ピノッキオだ！」とプルチネッラがさけびました。

「そうよ！そうよ！」と、ぶたいのわきからのぞいていたロザウラ夫人も、高い声をあげました。

「ピノッキオだ！ピノッキオだ！」と、ぶたいのそでからどっと出てきたあやつり人形たちが、みんなでさけびました。「ピノッキオだ。ぼくらの兄弟、ピノッキオだ！ピノッキオ、ばんざい！」

「ピノッキオ、こっちへおいで！」とアルレッキーノがさけびました。「木の兄弟たちのうでの中へおいで！」

こんなに心のこもったさそいを受けて、ピノッキオは客席のうしろからひとっとびで、前の列までやって来ました。もうひととびで、楽団の指揮者の頭の上に乗りました。3回目のひととびで、ぶたいの上におり立ちました。

このふしぎな役者の一座が、ピノッキオをむかえたときのよろこびのさけび声、だきしめ合い、こづき合い、親しみのこもったあいさつは、とても言葉では言いあらわせません。

それは胸を打つ光景でしたが、お客さんたちは劇が止まってしまったのを見ておこりだし、さけびはじめました。

「劇を、劇を、劇をやれ！」

いくらさけんでもむだでした。あやつり人形たちは劇をつづけるどころか、前の2倍も大さわぎをして、ピノッキオをかたにかつぎあげ、意気ようようとぶたいをねり歩いたのです。

ちょうどそのとき、座長が自分の部屋から出てきました。その姿はとてもおそろしく、ひと目見ただけでぞっとするほどでした。ひげはすみのようにまっ黒で、あごから足もとまでとどくほど長いのです。口はかまどのように大きく、歯は黄色いきばのようで、目はまっ赤にもえる2つの炭火のようでした。毛むくじゃらの大きな手には、緑のヘビと黒ネコのしっぽをより合わせて作った長いむちを持っていて、それをびゅんびゅんとおそろしげにふり回していました。

思いがけない人があらわれたので、だれも息をすることさえできませんでした。ハエが飛ぶ音さえ聞こえそうなほどでした。かわいそうなあやつり人形たちは、みんなそろって、あらしの中の木の葉のようにふるえていました。

「どうしておれの劇場で、こんな大さわぎを起こしたんだ？」と、その大男は、かぜをひいたおにのような声でピノッキオにたずねました。

「信じてください、だんなさま、ぼくのせいじゃないんです。」

「もういい！だまれ！おまえのことは、あとで始末してやる。」

劇が終わるとすぐに、座長は台所へ行きました。台所では、りっぱな大きい子ヒツジが、くしにさされてゆっくりと回りながら焼かれていました。焼き上げるには、もっとまきが必要でした。座長はアルレッキーノとプルチネッラをよんで、こう言いました。

「あの人形をここへつれてこい！よくかわいた木でできているようだ。この肉を焼くのに、いい火になるぞ。」

アルレッキーノとプルチネッラは、少しためらいました。でも、親方ににらまれてこわくなり、言いつけにしたがうために台所を出ていきました。数分後、ふたりはかわいそうなピノッキオをかかえてもどってきました。ピノッキオはウナギのように身をよじってもがきながら、あわれな声で泣きさけんでいました。

「お父さん、助けて！死にたくないよ！死にたくないよ！」

たんご と クイズ　第10章　人形たちの大かんげい

curtain （ぶたいの）幕	**stage** ぶたい	**beard** あごひげ
whip むち	**snakes** ヘビ	**lamb** 子ヒツジ
wood まき・木	**eel** ウナギ	

Q1 人形たちはピノッキオのことを何とよびましたか？

① ぼくらの兄弟　② ぼくらの王さま　③ ぼくらのお客さん

Q2 お客さんたちは、どうしておこりだしたの？

① 席がせまかったから　② 劇が止まってしまったから　③ ピノッキオが歌ったから

Q3 座長はピノッキオを何に使おうとしましたか？

① 新しい役者　② 子どものおもちゃ　③ 肉を焼くためのまき

こたえ

Q1 ① 人形たちは「ぼくらの兄弟、ピノッキオだ！」とさけんで、大よろこびでむかえました。

Q2 ② 人形たちがピノッキオをかんげいして劇をやめてしまったので、お客さんは「劇をやれ！」とさけびました。

Q3 ③ 子ヒツジを焼くまきが足りなかったので、木でできたピノッキオを火にくべようとしたのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。